

## サルトル *Baudelaire* における語りの複合過去

重見晋也

### 序

サルトルのボードレー論は、出版直後の激しい批判のためか<sup>1)</sup>、サルトルの作品の中で今日省みられることの少ない作品の一つとなっている。しかしながらボードレー論は、*L'Être et le Néant* において提唱された実存的精神分析の理論の最初の実践としての作品の位置からしても、また作品の精緻な構成という点からしても<sup>2)</sup>、その重要性が再認識されねばならない作品の一つであるといえよう。

ところで、テキストを読み解く上で、動詞の時制は重要な要素の一つを成している。ヴァインリヒが *Le Temps* の中で、動詞の時制を手がかりにカミュの *L'Étranger* の文体的特徴を指摘したことからも、それは明らかであろう。

そこで本論では、サルトルの *Baudelaire*<sup>3)</sup> のサルトル作品における位置を再確認するためにも、動詞の時制、特に複合過去の用法を手がかりに作品を再考しようとするものである。

動詞の「時制」を示すフランス語 «temps» は、「時制」と同時に「時間」をも表すが、サルトルは「時間」に対して非常に興味を持ち、時間論を幾つか執筆している。サルトルの時間論としては、先ず *L'Être et le Néant* の中で展開される時間論が有名であろうし、またその考察に先立つ形で発表されたフォークナーの『響きと怒り』論も良く知られている<sup>4)</sup>。

しかし、どちらにおいても、一読すると確かに動詞の時制ということを考察の出発点としてはいるのだが、それらは最終的には存在論的時間論、すなわち時制論ではなく時間性 (temporalité) についての考察になっているのであり、換言すれば、時制についての考察から出発してそれをアナロジーによって時間論へと転換してしまっているといえる。

ところで、そうした時間論とは別に、«L'Explication de *L'Étranger*»<sup>5)</sup> と題されたカミュ論には、*L'Étranger* における動詞の役割、特に単純過去と複合過去との機能の相違について、短いながらも興味深い考察が展開されている。そこでまず、この«L'Explication de *L'Étranger*» からサルトルの動詞の時制についての認識を確認することが必要となるであろう。さらに、*Baudelaire* 自体は、前述したように実存的精神分析の実践なのであり、それ故、サルトルの精神分析理論の中にみられる、分析した心理を記述する際の態度について確認することも必要となる。というのも事実、サルトルは彼の理論の中で、分析結果を記述する際の動詞の時制に関して示唆的な指摘を行っているからである。そして我々としては、それらの考察を

基に、Baudelaireにおける時制の特徴を考察することにしよう。

### I. «L'Explication de L'Étranger»におけるサルトルの時制論

サルトルのカミュ論の一つである«L'Explication de L'Étranger»は、サルトルの文学批評の中でも、早い時期に書かれた作品の一つである。あるいはボスケッティに従って、サルトルが「自分を取り囲む界から邪魔物を取り除くため」に、現代作家に関する一連の論文を発表し、それによって「自分の立場に定義と正当性を付与」した時期であったといっても良いかもしれない<sup>6)</sup>。確かに、ボスケッティの主張はおおむね首肯しうる。しかし、サルトルが論の中で辛辣な指摘をいくつかしているとはいえ、L'Étranger論の持つ肯定的調子は、Situations, Iなどに収められている一連の初期の時事文芸批評の中にあって特異な位置を占めているといえる。事実そのことは、サルトルが、結論としてこの小説が何一つ無駄なところがない世界を描いている、と評していることからもうかがえるのである<sup>7)</sup>。

L'Étranger論においてサルトルは、前述した二つの時間論の場合とは異なり、L'Étrangerの独特な世界を説明するために、動詞の時制に着目して論を展開している箇所がある。そしてそこにおける考察は、我々の考察の対象であるBaudelaireにおける動詞を考える上でも重要である。それ故、まずこのL'Étranger論を再考することから始めることにする。

サルトルは、批評«L'Explication de L'Étranger»の中で、le Mythe de Sisypheを参照しながら、カミュのL'Étrangerを評している。サルトルのこの評論が、小説をle Mythe de Sisypheの観点から照射したものであると考えるならば、確かにサルトルは、カミュを批判しているといえる。事実、「好んでヤスパース、ハイデガー、キルケゴールのテキストを引用して見せたり」(E.E., p.94)してはいるもののカミュが「必ずしも十分に理解しているとは思われない」(E.E., p.94)などと批判している。そのうえで、結論として、カミュはL'Étrangerを「ロマン」であるとするが、サルトルはむしろヴォルテールの「コント」であると述べることにより、カミュの無理解を強調しているとも考えられる。

ところで、このL'Étranger論において、こうした形而上的な観点とは異なる観点から小説を評していることも忘れてはならない。すなわち、サルトルはカミュとヘミングウェイとの「明らかな文体の血縁関係」(E.E., p.105)を指摘した上で、カミュがアメリカ的な分析的手法から多くを学んだのだとする<sup>8)</sup>。そしてその顕著な例として、カミュの物語における「時間の非連続性を透写にする、切れ切れの文章の非連続性」を論証しているのである。そこにおいて展開されているのが、L'Étrangerにおける動詞についてのサルトル的考察なのである。

[...]; une phrase de L'Étranger c'est une île. Et nous cascadons de phrase en phrase,

de néant en néant. C'est pour accentuer la solitude de chaque unité phrastique que M. Camus a choisi de faire son récit au parfait composé. (E.E., p.109.)

このようにして *L'Étranger* におけるカミュの文章は、連続性を奪われたものとして、すなわち非連続性によって特徴づけられると指摘されているのである。

ところでサルトルにとっては、作品の「時間の非連続性」と「文章の非連続性」とを生み出し、作品が「鳥」のごとく孤立した文の羅列としての印象を与えるのは、作者の「複合完了」（すなわち複合過去）という動詞時制の選択に由来する。それ故サルトルは、自らの主張を論拠のあるものとするために、上の引用に続けて、複合過去と「定過去」（すなわち単純過去）との違いについて、「超越性」という観点から考察している。

Le passé défini est le temps de la continuité : «Il se promena longtemps», ces mots nous renvoient à un plus-que-parfait, à un future; la réalité de la phrase, c'est le verbe, c'est l'acte, avec son caractère transitif, avec sa transcendance. «Il s'est promené longtemps» dissimule la verbalité du verbe; le verbe est rompu, brisé en deux : d'un côté nous trouvons un participe passé qui a perdu toute transcendance, inerte comme une chose, de l'autre le verbe «être» qui n'a que le sens d'une copule, qui rejoint le participe au substantif comme l'attribut au sujet; le caractère transitif du verbe s'est évanoui, la phrase s'est figée; sa réalité, à présent, c'est le nom. (E.E., p.109.)

「超越性」という概念は、サルトルが作品においてしばしば用いる概念であるが、ここにおいては、「超越」と「モノ(chose)」との対比から、それ自体として充足していないものに対して、「超越」という言葉を用いているのであり、その意味で「対自的」な概念である。またここにおいては、「transitif」という形容詞が「transcendance」と等価に用いられていることが示すように、動詞がもつ時間的経過を表現する機能<sup>9)</sup>が「超越的」なものとして提示されているのである。すなわち、サルトルによれば、その超越性によって単純過去は継続を表す時制であり、時間性をはっきりと保持しているものであって、それ故時間的連続としての行為を示すことになる。

しかしそれとは反対に、複合過去は二つの単語によって表されることにより、「超越性」を奪われて「モノ」となっているのであり、すなわち継続の概念、時間の連続性という概念が剥奪されているとされる。行為と時間性とを一つの動詞によって示す単純過去とは異なり、複合過去においては、時間の連続性は失われ、行為を示す過去分詞だけが残っているだけである。過去分詞は他の時制へと読者を

導かない、それ自体として過去時制を示す「モノ」や「名前」としてとらえられているのである。そして、「動詞 «être» はもはや繫辞の意味しか持たず、そこにおいてもまた連続性は失われるとされ、結果的には出来事の因果性が失われるとする。このように、サルトルは、単純過去を連続性を示す時制、そして複合過去を連続性が失われた時制として捉えているのである。ところで、論においてサルトルは、「小説」を「長い持続、生成を要求し、時間の非可逆性の明らかな現存を要求する」(E.E., p.112)のものであると捉えている。この指摘とあわせて、カミュのこの作品が「小説」ではなく<sup>10)</sup>「コント」であると結論づけられていることを考えると、サルトルが複合過去が「小説」の語りにそぐわない、と考えていることがわかる<sup>11)</sup>。

ところで、既に触れたが、ヴァインリヒは、サルトルの«L'Explication de L'Étranger»で展開された動詞の言語学的考察を、彼の*Le Temps*の中で何度となく引き合いに出している。

ヴァインリヒは、サルトルがカミュの*L'Étranger*における複合過去を「島」と形容している点を認めてはいる。しかし、ヴァインリヒによれば、カミュが望んだのはむしろ、複合過去のもつ「島」としての性格を、副詞を多用することによって減少させ、物語の流れを持続させることにある。そして彼によれば、カミュはそのことに成功しているのである。ヴァインリヒは、元來說明的な時制である複合過去を主動詞とするとともにそれと併せて副詞を多用することによって、一つの新しい物語時制を作ることに成功している、と指摘する<sup>12)</sup>。

副詞の頻出という点に関していえば、サルトルも*L'Étranger*論の中で、カミュの文体の特徴として言及してはいる。しかし、ヴァインリヒがそれらを物語の脈絡を持続させるとともに複合過去の物語性を引き出す重要な要素と考えているのに対して、サルトルはそれらをただ「非連結、対立、純粋な足し算以外の何ものをも喚起しない」(B., p.110)と否定的にとらえているのである。

このように二人の意見は異なっている。つまり、サルトルが複合過去によって出来事が「島」のように並置されただけで因果性が奪われているという観点からカミュの作品を「コント」の伝統に近づけ、小説の語りとしては疑問を投げかけているのに対して、ヴァインリヒはむしろ、そうしたカミュの複合過去の用法に小説の新しい語りを見ているのである<sup>13)</sup>。

## II. 「実存的的精神分析」と記述の時制

ボードレール論は実存的的精神分析という手法の最初の実践としてもまた位置づけられる。本章においては、*L'Être et le Néant*の中で展開されている実存的的精神分析の理論を取り上げ、その中に暗示されている時制についてのサルトルの考え方を考察する。

サルトルは*L'Être et le Néant*の中で実存的精神分析の可能性を示唆している。そこにおいてサルトルは、それまでのフロイト的な心理分析を批判しつつ、「根源的選択」と名付けられるような生の一契機を中心とした精神分析を提唱している。そしてそれが、サルトルのいう実存的精神分析である。

サルトル的精神分析の立場の中心は、何よりも先ず、経験論的心理学の二つの誤謬を指摘することにある。

経験論的と批判される従来の心理学の第一の誤謬とは、心理学が依拠する「欲望」という概念がそれ自身意識に内包されているものであり、よってその「欲望」の意味も「欲望」自体に内在する事になるという点にある。つまり従来の心理学は「欲望」という概念を中心にした自己充足的な理論にのみ依拠しており、そこには「超越」という観点が欠けていると批判しているのである。

第二の誤謬とは、欲望を中心として分析するあまり、あらかじめ経験的に理解された諸傾向によってのみ考察してしまったり、あるいはそうした諸傾向の関係性の考察を経て、それらの傾向を原初的な「欲望」に還元しようとするものである。そこにあるのは、「抽象的なものが具体的なものに先行しており、具体的なものは、抽象的な諸性質の一つの組織でしかない」(*E. et N.*, p.617)という仮定であるが、サルトルによれば、そうした仮定に基づく限り、個人の個別的な企てを説明することはできない。

これら二つの誤謬を指摘することによってサルトルが批判しているのは、従来の精神分析理論が、「欲望」というような現象にすべてを還元してしまうという点である。サルトルにとって精神分析とは、何よりもまず個人の生を説明するものであり、個人は自らの生を選びとる存在である以上、そして「欲望」はより「根源的」な選択によって説明されうる以上、「欲望」といった概念にとどまることなく、個人のより「根源的な選択」をこそ説明しなければならない、とサルトルは考える。

ところで、章の冒頭において以上のような経験論的心理学の誤謬を指摘する際に、それまでの心理学の過ちの一例として、サルトルはフロベールの心理分析に言及する。

Un critique, par exemple, voulant tenter la «psychologie» de Flaubert, écrira qu'il «paraît avoir connu comme état normal, dans sa première jeunesse, une exaltation continuelle faite du double sentiment de son ambition grandiose et de sa force invincible...» L'effervescence de son jeune sang se tourna *donc* en passion littéraire, ainsi qu'il arrive vers la dix-huitième année aux âmes précoces qui trouvent dans l'énergie du style ou les intensités d'une fiction de quoi tromper le besoin d'agir beaucoup ou de trop sentir, qui les tourmente. (*E. et N.*, p.617.)<sup>14)</sup>

ここにおいて問題となっているのは、ポール・ブルジェの *Essais de psychologie contemporaine* を引用しつつ、前述したような、従来の心理学の二つの誤謬を例証することにある。サルトルにとっては、「欲望」によってすべてを説明しようとする心理分析の態度は間違いであり、というのも、そのような従来の方法はただ出来事を通時的に再配列しているに過ぎないからである。ブルジェにおいては、フロベールが「自己の偉大な野心と自己のおさえがたい力との二重の感情から由来する不断の昂揚を、自分の正常な状態として、知っていたように思われる」と指摘しただけで、そこから *«donc»* とフロベールが文学に対する情熱をもつようになったことを説明づけている。サルトルが批判するのはこうした分析の不十分さであって、ブルジェにおいては何故19世紀の小説家が「不断の昂揚」を見いだすにいたったかは説明されないままなのである。

ところで、注目したいのは、サルトルの理論の妥当性よりもむしろ、サルトルがブルジェから引用した文の中の動詞の時制である。

引用からわかるとおり、動詞 *«se tourner»* は単純過去におかれてフロベールの生の出来事を述べる際に用いられている。*«ainsi que»* 以下の部分は、主節で述べられた出来事の解釈に当たる部分であり、それ故動詞 *«arriver»* や関係詞節の *«trouver»* や *«tourmenter»* は現在形とされているのである。こうした特徴は何もこの引用の箇所だけに見られるものでももちろんなく、ブルジェがフロベールの生を描写するのは、常に単純過去を用いた語りによってである<sup>15)</sup>。

すでに述べたように、この部分は、いわば批判されるべき心理分析の例としてサルトルが示したものだ。サルトルがここにおいて指摘するのは、ブルジェ的な心理分析が、フロベールの文学的気質を「欲望の組み合わせ」(*E. et N.*, p.617)によって説明するものでしかないということである。そしてそうした分析は、「経験的に確認されはする(…)が、文字どおり理解に苦しむ出来事の一こま一こまにたよって、この契機のうちに順序を立てることしかできなかった」(*E. et N.*, p.618)のである。こうした指摘は、単に心理分析の方法の問題を批判しているだけではないのであって、サルトルは記述という観点からも、この種の心理分析を批判しているのである<sup>16)</sup>。それ故、ここにおいて心理分析によって個別的な生を再構築する際に、単純過去を用いて記述することにサルトルが否定的である、とも考えることができるのである。

サルトルの精神分析の記述に対する批判から、われわれは小説 *La Nausée* を思い出すこともできる。

Je n'écris plus mon livre sur Rollebon; c'est fini, je ne peux plus l'écrire. Qu'est-ce que je vais faire de ma vie?

[...]; j'écrivais :

«On avait pris soin de répandre les bruits les plus sinistres. M. de Rollebon dut se laisser prendre à cette manœuvre, puisqu'il écrivit à son neveu, en date du 13 septembre, qu'il venait de rédiger son testament.» (La Nausée, p.113.)

ここに見られるように、主人公ロカントンはド・ロールボン氏についての歴史書を書こうとしているのであるが、その文章は単純過去によって執筆されていた。しかし、この日の日記を境に結局ロカントンはその著作を断念してしまうのである。もちろんこの挫折を他者の生を記述することの断念と捉えることが出来ることは確かである。しかし、そうであってなお、単純過去による単純過去による個別な生の記述が断念されたことには変わらないのである。

哲学的思索と小説というジャンルの違いがあることは確かである。しかし、ヴァインリヒの示した時制のゼロ度という観点から考えれば<sup>17)</sup>、問題となるのは、テキストのジャンルではなくテキストの示す世界の性質である。すなわち、テキストが「語られた世界」を問題にしているのかそれとも「説明された世界」を問題にしているのかということである<sup>18)</sup>。そうした観点からした場合、われわれが取り上げた二つのテキストは各々、個別の生を「語っている」のである。このことは換言すれば、*L'Être et le Néant* にせよ *La Nausée* にせよ、問題となっているのは、個別的な生を物語というエクリチュールによって再構築する試みである。ロカントンの挫折は、他者の生の記述という行為自体の挫折を示すものとも捉えることができるが、そうであってなお、ロールボン氏の歴史が単純過去で記されていたことも事実である。それ故、そうした生の再構築の営みの中で、サルトルが暗示しているのは、単純過去という時制に対する異議申し立てでもあるのだ。

ブルジェ批判においては、実存的精神分析自体がまだ理論の提唱という段階であったため、作品中で実践的にその理論が提示されてはいない。そこで次章において、われわれはサルトル的精神分析の最初の実践としての *Baudelaire* を対象に取り上げ、そこにおけるサルトルの時制の用法を検証していくことにする。

### III. *Baudelaire* における時制

ボードレール論においては、動詞の時制のゼロ度は直説法現在形にあるが、それは他の実存的精神分析の手法による作品、すなわちフロベール論、ジュネ論、マラルメ論にも共通している。ボードレール論も含めてこれらはすべて批評テキストであり、その点から考えても、時制のゼロ度が現在形におかれていることは不思議なことではない<sup>19)</sup>。

とはいえ、ボードレール論の中でサルトルが、別のテキストからの引用を除いて20回単純過去を用いていることもたしかである。例えば、ヒューズの「黒い帆」

からの一節などである。まとめて単純過去が用いられているのは、ボードレールが親族会議によって厳しく監視されていたという考察の部分においてである。

Grâce à lui(=au conseil de famille), il(=Baudelaire) fut toujours à l'attache, toujours dans les chaînes; toute sa vie ces hommes graves et imposants que Kafka eût nommé des «Messieurs» eurent le droit de lui parler sur un ton de sévérité paternelle; il dut mendier de l'argent comme un étudiant dépensier, et il n'en reçut jamais que grâce à la bienveillance de ces nombreux «pères», que la loi lui avait donnés. Il fut un éternel mineur, un adolescent vieilli et vécut dans la fureur et la haine mais sous la garde vigilante et rassurante d'Autrui.

(B., p.62. 強調筆者)

ここに描かれるのは、ボードレールが、押しつけられた親族会議に如何に依存した生を送っていたかを示すための一つのエピソードである。実際に、この単純過去の連続の後でサルトルが述べているのは、他者としての「『紳士方』」による庇護に飽きたらず、詩人がジョゼフ・ド・メーストルの庇護を求めるに至ったということである<sup>20</sup>。そして、サルトルはメーストルを「他者の最後の化身」(B., p.63.)と形容して、メーストルのボードレールに対する影響力を強調しているのである。それ故、親族会議についての記述で単純過去が用いられていたとしても、それは詩人の生を彩る出来事を語るためであって、いわばサルトルの説明の中にはめ込まれた挿話として機能していることになる。

さらに次のような例を挙げることもできる。

Cette longue et douloureuse dissolution fut choisie. Baudelaire a choisi de vivre le temps à rebours. Il a vécu à une époque qui venait d'inventer l'avenir.

(B., pp.152-153. 強調筆者)

ここで、「longue et douloureuse dissolution」として示されているのは、23才以降、ボードレールの生は結局のところ、それまでの創作活動の繰り返しやいつ終わるとも知れない推敲の連続であり、居場所が定まらずさまよい歩くような、よどんだ生活だったということである。そして、ボードレールがその生活を選び取ったということが、突然、単純過去によって物語として舞台の前面に押し出され、読者に提示される。単純過去および半過去はこの前後では全く用いられていないどころか、詩人がそうした生の崩壊を選び取ったことは、直後の文章では複合過去を用いて説明的に言い換えられてさえいるのである。

つまり、直説法現在から単純過去へと、すなわち説明におけるゼロ度から物語



におけるゼロ度へと、時制のゼロ度が瞬間的に移行することによって、説明から物語へとサルトルのテキストに対する態度が変わっていることになる。それは、単純過去によって、これまでに繰り広げられてきた指摘が読者に関するものではなくボードレールの生についてであることを、読者に再確認する契機を提供している。このことは親族会議についての記述で用いられていた単純過去の用法とも呼応している。すなわち、このように単純過去が一時的に挿入されることによって、説明から物語へとテキストが移行し、それによって読者の読みの緊張が解かれるのである。

単純過去に対してボードレール論の中でもっとも良く用いられている時制として複合過去が挙げられる。ヴァインリヒが指摘しているように、テキストが説明をしているような場合にあっては、複合過去は、時制のゼロ度としての現在形から見た過去へと向かう視点を表している<sup>21)</sup>。

ボードレール論の次のような章句は端的にそのことを示している。

Pour avoir choisi la lucidité, pour avoir découvert malgré lui la gratuité, le délaissement, la liberté redoutable de la conscience, Baudelaire s'est placé devant une alternative : puisqu'il n'est pas de principes tout faits auxquels s'accrocher, ou bien il lui faudra stagner dans une indifférentisme amoral ou bien il inventra lui-même le Bien et le Mal. (B., p.41.)

ここでは、ボードレールの過去の出来事が複合過去で示され、それについてのサルトルの見解が現在で語られている。あるいは、サルトルが両親と子どもとの封建的・宗教的關係を一般論として展開している場合にもそれは同様であって<sup>22)</sup>、これらの場合のように「説明された世界」において複合過去は過去の出来事を「回顧」<sup>23)</sup>するものである。

しかし特徴的であると思われるのは次のような例である。

Il s'est laissé juger, il a accepté ses juges, il écrivait même à l'Impératrice qu'il «avait été traité par la Justice avec une courtoisie admirable...»; mieux encore, il a postulé une réhabilitation sociale, d'abord la croix, puis l'Académie. Contre tous ceux qui ont souhaité de libérer les hommes, contre George Sand, contre Hugo, il a pris le parti de ses bourreaux, d'Ancele, d'Aupick, des policiers d'Empire, des académiciens; il a réclamé leur fouet, il a demandé qu'on le contraignît par la terreur à pratiquer les vertus qu'ils prônent : [...]. (B., p.47.)

ここに引用した箇所は、長い二つの文から成り立っているかに見えるが、実際

には、各文はpoint-virguleで区切られることによって短くなっているし、「Contre tous ceux[...], contre George Sand, contre Hugo」のように、単なる並列によって長くなっているだけである。また、point-virguleによって区切られた部分を個別に見ても、「Il s'est laissé juger, il a accepté ses juges, il écrivait [...]」のように、非常に短い文が並列されているだけであるか、あるいは一つの従属節か関係節を従えているだけであり、非常に簡潔である。

そして、複合過去によって表現されたことがらは、現在から見た過去の出来事を示すというよりはむしろ、それがあたかも物語において単純過去によって語られるかのごとく、テキストの前面に押し出され、その連続性が示されているのである。例えば、「彼は自分を裁判にかけさせて、裁判官たちを是認した。皇后宛に次のように書き送ってさえている」というように、動詞の並列は年代的時間にしたがって出来事を再配列し、時間の連続性を示しているのである。

さらにそこにおいては、文の因果性は慎重に排除されている。「自分を裁判にかけさせ」たことと「裁判官たちを是認した」ことにしても、ボードレールが自ら「望み」、他者に対しても「求め」ることも、それら語られた事象の間にあるはずの因果関係はここに引用した部分では明らかではない。

もちろん、これらのボードレールの行為をサルトルが指摘しているのは、*Les Fleurs du Mal* 裁判に際して、詩人が自らの作品とモラルを擁護することなく、裁判官たちの考えを受け入れたこと(B., pp.46-47.)を示すためであり、その点からすれば、われわれの引用も、ボードレールの非難されるべき行動を列挙することによって、サルトルが自らの論を展開しているとも考えられる。しかし、そうであってなお、詩人の行為がここにおいて語られたものとして提示されていることに変わりはないのである。

ところで、これは丁度、サルトルがカミュの*L'Étranger*を論じた際に指摘した、「鳥のような」複合過去の連続と似ている。確かに「L'Explication de *L'Étranger*」においてサルトルは、カミュの小説において用いられた複合過去が物語の時間を非連続的なものにして、と指摘してはいる。しかし、同じ論の中でサルトルがそうした非連続性をなくしては、「念入りに因果性を排除して、われわれに不条理として与えようとするこの世界」(E.E., p.112.)は成立し得なかったと述べているのである。また、サルトルはカミュの選択した複合過去が、「深重な諷刺の棘と、皮肉な人物描写とを具えた、短いモラリスト小説」(E.E., p.112)として不条理を描くには妥当なものだと考えているのである。そして、序において述べたように、Baudelaireが発表当初その辛辣なボードレール批判故に、激しい反応を引き起こしたことを考えあわせると、ジャンルこそ違え*L'Étranger*と同様に棘のあるこの作品においてサルトルが、カミュが用いたのと同じ機能を持つ複合過去を用いていると考えることはできるのである。

すなわちサルトルは、ヴァインリヒが指摘するように、「回顧時制」としてだけでなく、複合過去を時制のゼロ度として *Baudelaire* の中で用いている場合も見られるのである。ヴァインリヒとサルトルとのカミュの *L'Étranger* をめぐる見解の相違については前述したが、そうした違いにも関わらず、サルトルがここで用いる複合過去は、ヴァインリヒがカミュに認めた複合過去の用法であり、単純過去に代わって物語を構成する時制として用いるような複合過去の用法なのである。

## 結語

以上のように、動詞の時制という観点からすれば、*Baudelaire* の中でサルトルは、意識的にせよ無意識的にせよ、カミュの作品に見いだした複合過去の用法を、自らの作品の中に取り入れていることになる。そしてそれはヴァインリヒが新しい語りと指摘した複合過去の用法なのである。

われわれの考察が、サルトルの作品全体に対して有効であるかどうか、あるいはジャンルの制限があるのかについては、今後の課題である。というのも、サルトルの小説は、*La Nausée* を別にすれば、すべて単純過去を時制のゼロ度とする作品であるし、さらには *Les Mots* においてもまた、単純過去がゼロ度として用いられているからである。しかし、ジャンルを超えて様々な言説を残したサルトルの作品に対して、動詞の時制という視点から捉え直すことは、サルトルの作品の全体を再検討する上で有効な手段であるように思われる。

## 注

- 1) サルトルの *Baudelaire* とそれに対する批判の関係については、拙稿「サルトルの *Baudelaire* における詩人の成功と失敗」、『フランス文学』、n°21、日本フランス語フランス文学会中国・四国支部、1997年、pp.9-17参照。
- 2) サルトルが *Baudelaire* において如何に巧みに読者を自分の論に導いているかについては、拙稿「『ボードレール』におけるサルトル的戦略」、『広島大学フランス文学研究』、n°15、広島大学フランス文学研究会、1996年、pp.40-54参照。
- 3) Jean-Paul SARTRE, *Baudelaire, folio essais*, Éditions Gallimard, 1947. 本文中の邦訳については、『ボードレール』、佐藤朔訳、人文書院、1981年による。また以下B.と略す。
- 4) Cf. Jean-Paul SARTRE, «À propos de *Le Bruit et la Fureur*. La Temporalité chez Faulkner», in *Situations, I*, Éditions Gallimard, 1947, pp.65-75; *L'Être et le Néant*, Éditions Gallimard, 1943 (éd. de 1970), pp.145-210. 後者については以下E. et N.と略す。また、本文中の邦訳については「存在と無」、松浪信三郎訳、人文書院、1979

年を参照した。

<sup>5)</sup> Jean-Paul SARTRE, «L'Explication de "L'Étranger"», in *Situations, I*, Éditions Gallimard, 1947, pp.92-112. 本文中の邦訳は「『異邦人』解説」, 『シチュエーション I』, 窪田啓作訳, 人文書院, 1981年を参照した。また, 以下 E.E. と略す。

<sup>6)</sup> Anna BOSCHETTI, *Sartre et «les Temps Modernes»*, Éditions de Minuit, 1985, p.63. 本文中の訳は「知識人の覇権」, 石崎晴己訳, 新評論, 1987年を参照した。また, 「界」(champ) という概念は, Pierre BOURDIEU の概念であるが, 訳語に関しては同書巻末の石崎晴己氏による解説に従った。同語に関して石井洋二郎氏は, ブルデュエの「ディスタンクシオン」で「場」という語を当てている。ピエール・ブルデュエ, 「ディスタンクシオン II」, 「訳者解説」, 石井洋二郎訳, 藤原書店, 1991年, pp.467-492 を参照。

<sup>7)</sup> E.E., p.112. «Il n'est pas un détail inutile, pas un qui ne soit repris par la suite et versé au débat; et, le livre fermé, nous comprenons qu'il ne pouvait pas commencer autrement, qu'il ne pouvait pas avoir une autre fin : [...]»

<sup>8)</sup> 但し, ヴァインリヒは, カミュの言語学的特徴をヘミングウェイのエクリチュールに引き寄せるのは誤りだと指摘している。サルトルの『異邦人』論とヴァインリヒの『異邦人』についての考察との比較については後述する。Cf. Harald WEINRICH, *Le Temps* traduit par Michèle LACOSTE, Éditions du Seuil, 1973, p.309. 本文中の訳は H. ヴァインリヒ, 「時制論」, 脇阪豊・大滝敏夫・竹島俊之・原野昇共訳, 紀伊国屋書店, 1982年を参照した。

<sup>9)</sup> ここにおいて «transitif» という語は, 「他動性」というよりも「推移性」を示しているであろう。というのも, ここにおいてサルトルが問題にしているのは, 単純過去と大過去や未来といった別の時制との関連だからである。よってわれわれとしては, サルトルが単純過去を「推移性」, すなわち時間的経過を伴う行為を示すと考えている, と捉えることにする。

<sup>10)</sup> 無論, サルトルが *L'Étranger* の作品としての価値に異議を唱えているというわけではない。しかし, サルトルは次のように述べて, *L'Étranger* を「小説」と呼ぶことを拒んでいる: «Et comment classer cet ouvrage sec et net, [...] Nous ne saurions l'appeler un récit. [...] M. Camus le nomme «roman». Pourtant le roman exige une durée continu, un devenir, la présence manifeste de l'irréversibilité du temps.» (E.E., p.112).

<sup>11)</sup> 語りという概念については, バルト以降ジュネットらの研究があるが, ジュネットが提唱する *histoire/récit/narration* の関係から捉えられた「語り」という概念は, サルトルには欠如している。事実, この «L'Explication de *L'Étranger*» においても, 前注の引用を見ればわかるように, サルトルは «récit» をジャンルとして捉えており, その点からもサルトルの観点はナラトロジーの観点とは異なっ

いる。ジェラルド・ジュネット、『物語のディスクール』、花輪光・和泉涼一訳、水声社、1985年参照。

<sup>12</sup> Harald WEINRICH, *op.cit.*, p.311. ヴァインリヒは、小説の描き出す対象（自分に無関係と思っている殺人と裁判所と監獄が舞台になる）が、この新しい物語時制を可能にしている要素の一つであることも指摘している。

<sup>13</sup> ヴァインリヒとサルトルとの意見の相違に関しては、各々の論の執筆された時代も考慮しなければならないだろう。サルトルのカミュ論は1942年と戦前であるのに対して、ヴァインリヒの時制論は1964年に書かれている。ロブ＝グリエの *Pour un nouveau roman* が1961年の出版であるから、サルトルのカミュ論との時代的な隔たりは非常に大きいといえる。

<sup>14</sup> ここにおいて「un critique」とは、*L'Être et le Néant*の注が示しているようにポール・ブルジェである。このテキストからでははっきりとわからないが、松浪信三郎訳が訂正しているように、実際には「L'effervescence de son jeune sang」以下引用の最後までも、すべてブルジェのフロベール論からの引用である。但し、引用した文の最後から2行目の先頭の「du style」は、ブルジェでは「d'un style」となっている。Cf. Paul BOURGET, *Essais de psychologie contemporaines, études littéraires*, Éditions Gallimard, 1993, pp.88-89.

<sup>15</sup> もちろんブルジェの作品自体批評であり、時制のゼロ度は直接法現在である（時制のゼロ度については本稿注17を参照のこと）。しかし、ブルジェがフロベールの生を描写する場合には、必ず単純過去が用いられている。サルトルが *L'Être et le Néant* に引用したのは、それらのうちでもっとも特徴的な部分であるが、ここではブルジェがロマン主義作家としてのフロベールを指摘している次の例を挙げておく：「Romantique par sa race et par son éducation, Flaubert le fut d'autant plus énergiquement qu'il resta provincial, et c'est là son originalité supérieure, jusqu'à son dernier jour. Ayant embrassé l'Idéal romantique avec tant de ferveur, plus qu'aucun autre il devait ressentir et il ressentit les mélancolies que cet Idéal enveloppe par définition, comme diraient les mathématiciens; et, de fait, aucun homme ne fut plus complètement en désaccord avec son milieu et avec sa propre chimère.» (BOURGET, *ibid.*, pp.89-90. 強調筆者)。

<sup>16</sup> サルトルはブルジェ的な心理分析に対する批判の後に次のように述べて、自らの批判が心理分析の記述も視野においたものであることを示している：「Voilà pourtant ce qu'on nomme de la psychologie. Ouvrez une biographie au hasard, et c'est le genre de description que vous y trouverez, plus ou moins coupée par des récits d'événements extérieures[...]» (E. et N., p.618)。

<sup>17</sup> 時制のゼロ度という概念については、WEINRICH, *op.cit.*, pp.66-70を参照のこと。

<sup>18)</sup> 語りの時制とジャンルに関しては、Käte HAMBURGER の *Logique des genres littéraires* (traduit de l'allemand par Pierre Cadiot, Éditions du Seuil, coll.«Poétique», 1986)があるが、ヴァインリヒは、ジュネット同様、彼女の論の価値を認めつつも疑問視していることを指摘しておく (Cf. WEINRICH, *op.cit.*, p.59-60 及びジュネット, 前掲書, p.355)。

<sup>19)</sup> ヴァインリヒが指摘しているように、あるテキストにおける時制のゼロ度というのは、そのテキスト唯一の時制というわけではもちろんないのであって、「語りの時制」と「説明の時制」とが混在することは十分可能であり、ヴァインリヒは例としてヴァレリーの *La Soirée avec M. Teste* の冒頭を挙げている。Cf. *ibid.*, p.92.

語りの時制としての単純過去については、Alain ROBBE-GRILLET, «Sur quelques notions périmées», *Pour un Nouveau Roman*, Les Éditions de Minuit, 1961, pp.25-44, 特に pp.31-32 も参照のこと。

<sup>20)</sup> SARTRE, *Baudelaire*, p.63.

<sup>21)</sup> Cf. WEINRICH, *op.cit.*, p.92.

<sup>22)</sup> SARTRE, *op.cit.*, p.51.

<sup>23)</sup> ヴァインリヒはフランス語の複合過去をドイツ語や英語の現在完了と同じ「回顧時制 (le temps de la rétrospection)」であると述べている。Cf. WEINRICH, *op.cit.*, p.92.

## Le Passé composé narratif dans le *Baudelaire* de Sartre

SHIGEMI Shinya

Le *Baudelaire* de Sartre est une des œuvres les plus négligées de sa création. La réflexion sur le temps des verbes peut jouer un rôle important dans l'analyse du texte : nous allons donc essayer de l'interpréter de ce point de vue.

Dans «L'Explication de *L'Étranger*», Sartre développe son idée sur la différence entre le passé simple et le passé composé. À la différence du passé simple, qui sert de temps narratif au roman traditionnel, Camus écrit *l'Étranger* au passé composé; Sartre le qualifie de «conte» à la Voltaire avec des «îles» phrastiques au passé composé. Aussi le passé composé ne constitue-t-il pas, pour Sartre, un temps narratif romanesque pour décrire la continuité du récit. Or, Weinrich, le linguiste, fait une référence à cette idée sartrienne dans son œuvre sur le temps. En admettant que le passé composé chez Camus a la fonction d'une «île» isolée, il pense que, dans *l'Étranger*, la fréquence des adverbes finit par créer une continuité du récit, voire une narration d'un type nouveau.

Comme le *Baudelaire* de Sartre est la première application de sa théorie de la psychanalyse existentielle développée dans *l'Être et le Néant*, il ne serait pas inutile de chercher la pensée sartrienne sur le temps dans cette théorie. En prenant l'exemple de Paul Bourget, Sartre y fait la critique de la psychanalyse empirique de Freud. On peut y discerner une pensée négative de Sartre sur l'écriture au passé simple, parce qu'il cite en la critiquant l'explication de Bourget sur la décision de Flaubert de devenir un écrivain; cette critique nous évoque, d'ailleurs, l'échec de Roquentin à reconstituer la vie de Rollebon par l'écriture au passé simple dans *la Nausée*. C'est ainsi que l'on a le droit de penser que le passé simple ne lui semble pas propre à décrire la vie d'un individu.

Quant au *Baudelaire*, dans lequel le degré-zéro du temps se fixe sur l'indicatif présent, on trouve, certes, quelques parties mises au passé simple, mais cet emploi reste limité et temporaire; la partie mise au passé simple n'a qu'un rôle secondaire de mise en relief; il offre en outre au lecteur un repos au cours de sa lecture. En ce qui concerne le passé composé, la plupart des passages concernés sont des rétrospectives. Mais nous pouvons observer des descriptions à propos desquelles il nous est permis d'identifier l'emploi narratif qui est suggéré par Weinrich dans sa réflexion sur le temps chez Camus.

Nous pouvons donc conclure que Sartre se sert du passé composé à la manière de Camus dans *l'Étranger*.